

レトルト彼

霜月 透子

三十六度。できあがりだ。

浴槽につけておいた巨大な袋。表面には黒いテープ状の温度計がついている。目盛りの端から黄緑色に変わっていき、たったいま三十六度に達した。

私はそろそろと袋の口を開く。中にはできたてほかほかの「彼」が膝を抱えて座っていた。

「あの……動ける？」

袋の口を大きく開きながら声をかけると、「彼」はようやく顔を上げた。涼しげな目元のおとなしそうな顔をしている。不安そうに見上げる視線に見つめられた瞬間、ドキッとキュンが同時に胸を満たした。これは当たり前かもしれない。

不要になった袋を腕で巻き取るようにたぐり寄せると、「彼」は足や腰を浮かせて全身を現した。それから立ち上がろうとするのを慌てて押しとどめる。

「ちょ、ちょっと待って！ タオルと服を持ってくるから。そのまま……そのままね」

ドキドキ高鳴る胸に袋を抱え込んで浴室を後にする。

空の袋をゴミ箱に押し込む際に、袋に印刷された商品名が目に入った。

《レトルト彼 甘口》

さて、甘口の彼とはどんなものだろう。私はタオルとスウェットを脱衣所に持って行くと、部屋に戻って彼を待った。

初めてこの商品を知ったのは母からの電話だった。

『ねえちょっと、あんた知ってる？ お隣の山田さんから教えてもらったんだけどね、すごいレトルトがあるのよ』

「レトルト？ 袋に入っていてお湯で温めるやつ？」

『そう。それぞれ。そのね、《レトルト彼》っていうのがすごい』

「すごいってなによ。たかがレトルトカレーでしょ？ 高級食材が使われてい

るとか？」

『カレーじゃないわよ、彼よ。か、れ。お母さんもね、ひとつ試してみただけど、すごくいいのよ』

「だからカレーでしょ？」

『彼だってば。わかんない子ねえ。いいわ、送ってあげるから試してみなさいよ。あんだ、好みは？ 甘口？ 辛口？』

「そんなのどっちでもいいよ。ていうか、いらないからね」

『そんなこと言わないで試してみなさいって。それで感想聞かせてね。……それにしても、どっちでもって、あんだ、ストライクゾーン広いのね』

そんなやりとりの翌日にはもう宅配便が届いた。甘口と辛口がひとつずつ。袋に厚みはないためコンパクトに折り畳んであるが、広げると寝袋ほどの大きさがあった。袋には大きな文字で商品名が印刷されている。

《レトルト彼》

なるほど、カレーじゃなくて彼か。ようやく先日の母の言葉が理解できた。こんなわけのわからんものより食費の足しになるカレーの方がよかったなと思っただが、まあかれこれ独り身の年数も片手では数え切れなくなっている。そろそろまた彼氏などというものを味わってみるのもやぶさかではない。などと誰にともなく言い訳じみた理由を述べて、私は同梱されていた取扱説明書を手にとった。

【作り方】

四十二度のお湯を張った浴槽に入れ、三十六度まで温めてください。袋表面にある温度シールの目盛りが三十六度になったら完成です。

なお、三十六度に満たなくても、三十五度以上であれば開封できます。その場合、開封後に三十六度までの追加加熱が必要となります。追加加熱は入浴での温めでは温度が上がリません。必ず「抱き締める」か「日光浴」にて加熱してください。

「ぬるい」から「あつあつ」までお好みに合わせて温めてください。追加加熱での作り方は、二人の関係を温める過程もお楽しみになりたい方におすすりめです。

たしかにカレーではなかった。しかしレトルトと呼ぶのもためらわれる。温めることで膨らむなら、レトルトよりもむしろインスタントといったところだろう。

温めるなら途中開封はやめよう。私は恋の駆け引きみたいなものが好きではない。付き合う直前が一番楽しいとかいう人の気が知れない。どうしても嫌というわけではないが、はっきり言ってめんどくさい。というわけでさっそく温めたのだが。

ぺたぺたと近づいてくるスリッパの音に振り向くと彼が立っていた。言うまでもなく、できたてほかほかのあの「彼」だ。

脱衣所に用意しておいたグレーのスウェット上下を着ている。

やばい。マジかっこいい。シンプルなスウェット姿でこれだもの、おしゃれしたら正視できないかもしれない。

「これでいいのかな？」

グレーのスウェットの袖口から指先だけ出して軽く腕を広げた姿は、なんともいじらしくかわいらしい。

「……いい」

思わず漏れた心の声を返事だと思ったらしく、彼はほっとしたように顔を綻ばせた。やっぱりかわいい。

かっこいい外見にかわいい内面。なにこれ、最高だ。

実をいうと、先に温めたのは辛口の方だった。これがなかなか辛かった。いわゆるオレ様系で、偉そうなことこの上ない。うん、べつにいいんだ、壁ドンとかされるのもドキドキしたし。けど、けどさ、自立した男性が自信たっぷりな強気姿勢なのはかっこいいんだけど、所詮レトルトなのだ。私が仕事に行っている間も家において、家事をすることもないので、態度だけ大きくて。ペットだと思えばいいのだろうか。いや、思えない。思えるわけがない。だって、かわいげないし。

そんなわけで取扱説明書をめくった。

【故障かなと思ったら】

態度の変化↓冷たくなったら再び温めると優しくなります。繰り返し温めてご使用いただけますが、三年ほどで温まりにくくなります。

これかと思ったが、態度は変化したわけではなく、もともとのものだから該当しないだろう。

さらにページをめくるとそれらしいものがあった。

【よくある質問】

(Q) こんな関係はもう終わりにしたいのですがどうすればいいですか？

(A) 燃えるゴミとして処分できます。お住まいの地区の分別に従ってください。

ゴミか。気に入らないとはいえ、仮にも元彼だ。いくらなんでもゴミ扱いは忍びない。そう思い、とりあえず小さくまとめて冷凍庫に保存したのだった。

そんな辛口の彼のことがあったから、甘口の方も期待はしていなかった。

ところがどうだ。嬉しい誤算とはこういうことなのだろう。

一日中家にいることには変わらないが、私がい物さえしておけば自主的に夕食を作っておいてくれるではないか。カレー風味のメニューが多いのが気になるところだが、疲れて帰宅したら電気がついていて温かい食事が用意されている幸せの前には些細なことだ。あまり丁寧ではないが、掃除だってやってくれる。それでいてペットのように甘えてきたりもする。

さすが甘口。どうやら私には甘口が合うようだ。

長く付き合いたいから、毎日入浴させて温め直すことも忘れなかった。

しかし、思わぬ弊害が現れた。煮込まれていくのか、日に日に甘みが濃縮されている。

「ただいまー」

「うわーん。ハニー、寂しかったよー。僕、すっごく寂しかったのー」

「うわっ、カレーのついた手で抱きつくな！ スーツが汚れる！」

「ええー。ハニー、冷たい……」

とまあ、こんな感じである。

少々うっとおしくはあるものの、不満というほどのことでもなかった。のだが。いつしか、朝、出かけようとするど駄々をこねるようになった。

「ハニー、今日もお仕事行くの？」

「行くよ、そりゃ」

「僕を置いていくんだね……」

「うん。連れていけないからね」

「早く帰ってくる？」

「そうね、いつも通りに帰ってくるよ。だからそこどいて。靴が履けないよ」

「じゃあ、じゃあ、僕、がんばって留守番するから、いい子いい子して」

「はいはい。いい子いい子」

ドアノブに手をかけたまま反対の手で甘口の髪をくしゃくしゃとかき回し、引きとめられる前に急いで外へ出た。ドアが閉まる寸前、甘口の声が聞こえた。

「ハニー！ 僕、がんばるー！ カンガルー！」

早足で駅へ向かいながら私は思った。もう賞味期限切れだ、と。

甘々になっていくのはまだよかった。だが、カンガルーは受け入れられない。

がんばるー、カンガルーだと？ ありえない。

やはりレトルトは所詮レトルト。それなりだったのだ。母が気に入ったからといって、私にも合うとは限らない。

感想を聞かせてと言われていたので、昼休みに電話をかけた。

「もしもしお母さん？ あれ、試したよ。《レトルト彼》」

『ああ。どうだった？』

「うん。やっぱし、私はいまいちだったわ」

『そうでしょう？ そうなのよ。私も初めは感動したんだけど、所詮レトルトよねえ。そんな話を山田さんとしていたらね、もっといいのがあるんですって。さっき送ったから楽しみにしててね』

「もういいって……」

既に切れた電話に向かってそう呟きながらも、次こそはと期待している私がいるのだった。

【商品展開】

《レトルト彼》ではご満足いただけない場合、《本格彼》をご用意しております。
《本格彼手作りキット》には各種スパイスをはじめ、すべての材料が入っていますので、お客様ご自身でお作りください。材料の配合をカスタマイズすることで、お客様だけの彼を作ることも可能です。

(了)